



隠れた SOS を見つける

関西学院千里国際高等部 1年 藤戸 美妃

空港に到着して早々、首都ビエンチャンに向かう道路は、私の思い描いていた後進国としてのラオスとはすっかり異なり、綺麗に整備されていた。これを見て、何処かほっとする自分がいた。聞くと、その道路は日本が援助して作った道路だそうだ。だが少し市内を外れると、道はガタガタで整備されたとは言えない道ばかりだった。

研修中お世話になった通訳の方はこう教えてくれた。

「完璧な道路を作ると、ラオスの道路会社は仕事なくなるからね。」

ラオスの道路会社が整備する道路は3年程度しかもたないそうだ。言ってしまえば、会社自身が短期間しかもたないように作っている。でないと作業員が失業してしまうからだ。

この話を聞き、国民が目立った貧困生活を目にしなかったからと安心して自分を情けなく感じた。日本ではこんな考え方をしたことも聞いたこともなかったが、ラオスには、一見態度では貧しい素振りを見せていなくても、心では「仕事なくなり、収入がなくなること」を不安に思い、安全な道路を作ることを躊躇するラオスの人々がいたのだ。

本研修で、私は国民の貧しさは一目で見ることにはできないことを学んだ。貧困問題を本当に解決する人には、人々の考え方をしっかり観察し、表情や見た目に隠れた SOS のサインをきちんと見極める能力が不可欠なのだと痛感した。

そんな「隠れた SOS のサインを探し、解決できる人」に私自身がなろうと強く決意した研修だった。